

どうあったか どうあるべきか

体験を顧みて次の準備へ



6・26に次いで7・26...その間わずかに四年、災害常襲地帯たる本県では、常に災害常襲の態勢を忘れてはなりません。そこで、今回の災害に関係ふかい方々のお集まりを願つて、その貴重な体験と、近く来るべき台風期への用意を話していただきました。

観測できぬ小地域

司会・本日は七・二六災害の体験を語つていた多くとともに、近くやってくる台風期に、その体験をどう生かすかというのをテーマとして、いろいろお話を聞いたと存じます。最初に先ず測候所長さんから当時の気象状況について...



木郎・今年の梅雨は非常に要調で、いつまでも前線が停滞していましたが。例年なら六月上旬から一ヶ月もすると、北上して真夏がくるのですが、今年七月廿五六頃にも、弱い前線がうろくくしていたのです。しかしそれは中二〇キロ、長さ五、六十キロという小範囲のもので非常な局地的了でした。大体台風は中も長さも数百キロから一千キロ位に及ぶのが普通ですが、観測の設備もこれに匹敵するように出来ており、今度のような小地域のものは、観測のアミ目からみてもたないわけですね。それで局地的に大村観測あたりは七〇〇ミリもふるし、はしつこの熊本でも四〇〇ミリという豪

今年の水防態勢

司会・次に今年水防態勢についてどうぞ...



林田・今年は七・二六の前から雨が多かったので、私たちが十分態勢を整えていたのですが、当日は例のような大雨になつて折角出したゾリも動けず、土木事務所からの連絡をきめるのに大変だつたわけです。何しろ局地的な豪雨で、限局は大して降つていないのに、玉名では大雨といった具合、備蓄資材は十分用意があつたのですが、不意の豪雨で応急策のとれぬところもありました。

木郎・県全体としては一〇〇一・二〇〇ミリという私たちの予報が出たのですが、部分の適度な観測が出来なかつたのです。



井上・電話連絡がとれないのは困りました。高橋へ行つた消防車も、田輪まで行けなく、何となくその連絡も出来なかつたのです。何となくでも警察は非常電話があるから、一番効果的な活動が出来ます。そうした点は電話局にも善処を望みたいと思ひます。とにかく消防の事は、災害が始まつた即下から、あそびつけるまでが主です。それから、生命がけの仕事ですが、いつ際だから写真にとる暇もなく、やつた仕事で記録に残らないうらみがあります。

高をくくつたのが悪い

ほしい記録写真



樋口・通信連絡の施設は自衛隊にもないので、警察の連絡でいろいろの処理が非常に助かりました。廿五日の二十二時四十分、警察から出動の要請を受けたので、早速その準備にかつたのですが、無電は雷のために不通となり折角大偵察隊も役に立たない始末、とにかく方として一個中隊出し、清水方面に向かいましたが、室園辺は一メートル上の洪水が進めません。ゾリ、六輪車牽引車と次々に出したのが駄目、全くいらなくなりました。自衛隊をめておいて水が出たとなつた恰好です(笑)。もつと早く現場に着いたら人命救助にもつと後立



要江に着いたのが夜十二時過ぎでした。帰りは雨舞でロープをつたつたりしながら夜明の干潮を待つて八時頃つと熊本へ着いたらよな有様です。電話も三時間位もかたねば通せず閉口しました。どうしても自動車に無電の設備はぜひ必要ですね。南消防団からも約二百名出動しましたが、八月十日まで十五日働いたわけですが、現在全市には三、二五〇名の消防がいます。

つたかに残念に思つています。



松尾方面も道路が進めないのが山越えをしたのですが、これが又どうのの石ころ道でスピードが出ず、すつかり時間を食われてしまいました。坂本・警察では事前による警備態勢を整えるため、測候所からの情報を受けるのと同時に、眼下二十七万所の雨量測定器をもつと刻々に災害の迫るのをキャッチしたわけですね。廿五日の十六時二十五分に注意報が出ましたが、その後、熊本は勿論、玉名山鹿、荒尾、御船などの情報も入るし、北阿賀をはじめその他の資材を集め、南宝太郎はロープその他、荒尾なども非常に集めて防備につとめました。

出席者	
熊本北消防団長	井上 清隆
熊本県警察本部警務交通課長	坂本 末
熊本副団長	木村 清
自衛隊第八混成団第二部長	藤村 重
熊本寺原町(罹災者)	林 齊
熊本県監理課長	斎藤 千
熊本県監理課長補佐	藤田 隆
農業経済課長補佐	石 泰
社会課長	山田 正
広報課長	三 生
報道係長(司会)	三 生

雨だつたのですが、測候所としては、大局的に見て観測下の降雨量は一〇〇一・二〇〇ミリと観測して、廿五日の午後風雨注意報を出したのです。ところが夜の十時ごろにはもう二〇〇ミリをこえるという有様で、全く予想外になつてしまいました。この種の豪雨は、昭和十四年大坂の六甲山を中心としたもの、廿八年の和歌山県日高川上流地域のものなどが代表的で、現在の施設では観測のできぬ特殊な現象という外ありません。結局、もつと施設を充実し、係員をふやして完全の態勢を整えることが必要だと思います。

要江の山崩れは九時頃情報が入り、続いて寺原、田端、上熊本方面の浸水もあつたので、これらの方面にはパトカーを飛ばし、拡声器をつかつて広報活動にうつりました。一方NHKやRKKへお願いしてラジオでの広報につとめてもらいましたが、雷に助けられて停電したところもあり、苦勞の割に効果があらぬ場面もあつたようです。今度の被害を大きくしたのは、一つは白川に水が出ないから大丈夫と思つたと、第二は一時的な立入りと高をくくつたためだと思います。電話の不通も大きなマイナスですが、要江からは公衆電話一本が助かつて非常に役に立ちました。三角の海上保安部にも救助を頼んだのですが、船の出たのが二十七日の朝五時のことで、無電の感度が悪くてどうも器材があるか連絡がとれず、又三角へ引返して有線連絡を要するという場面もありました。警察本部からはポート三郎、鉄舟二隻を出しましたが、記録をとるよりも当面の救助活動に追われて写真も何もつていません。村上・消防団もそんなお話をしたが、記録もせよほしいのですから、今度からは写真もおとり下さるよむをお願いします。坂本・たしかに記録は大切ですね。井上・何しろ余裕がないのですから警察は情報が入るから水防団と